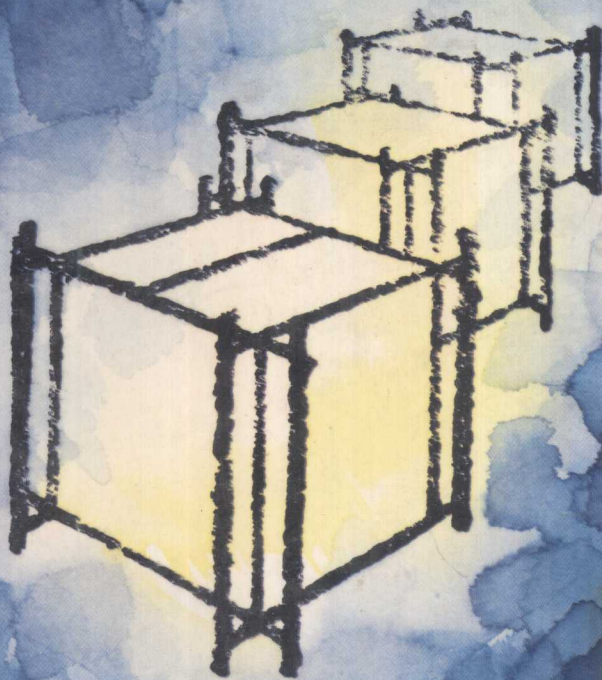
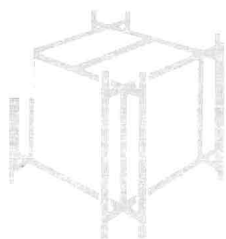


高木健夫の 新聞走馬灯



高木健夫の 新聞走馬灯



地産出版

著者略歴

たかぎ・たけお

宮城県出身。国民新聞社を経て読売新聞に入り、第一線ジャーナリストとして半世紀。読売新聞朝刊のコラム『編集手帳』の筆者として戦後十数年にわたり健筆をふるったことは有名。政治、歴史、文学、中国文化等、幅広い報道、評論活動は定評がある。ライフワークのひとつとして高く評価されている『新聞小説史』上下二巻をはじめ著書数十冊。

現住所 東京都渋谷区渋谷3-5-9

新聞走馬灯

1978年5月15日 初版発行

著 者 高木健夫

発行者 竹井博康

発行所 地産出版(株)

〒150 東京都渋谷区神宮前6-12-18

電 話 (03) 409-5632

印刷所 鎌倉印刷

製本所 ナショナル製本

ま え が き

わたしが国民新聞社に入社したのは、蘇峰先生が健在で社長をしていたころの昭和二年だった。そして、読売新聞百年史の編集囑託をやめたのが昭和五十一年だが、やめてからあとも、地方紙のコラムを老骨に鞭打って書いている現在も、新聞記者として働いていると認められれば、とにかく、半世紀をジャーナリストとして暮して来たことになる。

その間、職業として、新聞に書いて来た文章は、これ、ことごとく第三人称で、つまり他人事のように、冷静に、客観的かつ機械的に書いて来た乾いた職人文章で、そこに扱ったものは事件、問題、そうでなければ第二人称によるインタビューから「右について何々氏は語る」の「語る記事」で、第一人称で文章を書く機会は特殊なルポルタージュか、署名記事、あるいは「記者は被災地に日本人記者として第一歩を印した」式のもの以外は、非常に少ない。

三人称で書くものが職業的には、いちばん慣れているわけだが、なかでも「……成行が目されている」「……とみられる」「……といわれる」などという常套文句で、記事全体を締めくくると、おのれは姿かくしのマントを着たようで、えらく気が楽になる、という一種の責任のがれの習性を、新聞記者は持っている。

この常套文句が気になり出したのは戦後コラムを担当するようになってからのことである。朝刊一面下のコラムは、一応アノニームで、無署名ではあるが、ピリリとからくときにすっぽく、苦がッぽろい個人的な体臭を放っている。したがって、主張にしても、攻撃にしても、かなりアクの強い個性を前面に押し出して、黒か、白かを、主観の割合を七三ぐらいに濃くして表現することになっていた。ここでは「わたしは」とか「記者

は」とか、一人称でズバリといいきることもしばしばある。

そういう文章を書きつづけているうちに、ことに一面の政局記事などのまえがきに、このマンネリズムの常套文句をみると、胸がムカムカして来るようになった。つまり、一人で一つのコラムを持つことは、そして、その仕事を十年―十五年とつづけているうちに、文章を書く体質がかわってくるものらしい。リポーターではなく、エッセイストになってしまう。そうして、すくなくとも、文字どおりの「文責記者」——おのれの文章に、おのれが責任をもつ、ということになってしまう。

こうなると、まいにち「責任」のベルトでアタマをみずから締めつけているようなもので、つらいといえぱつらいが、書いたあとはまた格別に爽快なものである。

主観を濃く打ち出して、第一人称で書くコラムだが、しかし、おのれの私生活を身辺雑記風に書くことは、わたしは絶対に避けてきた。逆に、この身辺雑記風のもので独特の夕刊コラムの型を打ち出したのは、いまは亡き友・細川忠雄の名人芸であった。

細川の名人芸が、おのれのコラムにほしい、と切実に思ったことが、わが人生において二度あった。一度は父が死んだとき。二度めは母が死んだとき。わたしは全身的な茫然たる悲嘆にどっぷりと漬かりながら、しかし、その朝も、その翌日も、政府の失政を痛撃し、風俗のタイハイを嘆き、季節のうつろいを何気なく書いていかねばならぬ——何喰わぬ顔とは、こういう文章を絵に描いたようなものなのだ、と歯を食いしばった。

この悲しみを、細川のコラムのように、おのれをめぐる世情に映して淡々と書くことができたなら……と、その時ばかりは、私生活を書くことをみずからのタブーとしてきたことが、うらめしかった。

ところで、本書は、まったく自分自身のことを、考えを、その時々^{トキトキ}の需めに応じて書いたものが多い。『新聞走馬灯』という題名は、書き散らしたものを丹念に整理して一本にまとめてくれた、同じ社の同じ釜のメシを食った仲間の浅野恭平がつけてくれた。なるほど、かれは整理部長という「見出し」の専門家だけあって、本書の性格をいみじくも表現してくれた。

おのれのことを一人称で書いたものは、おのれ自身を衆目にさらし、素ッ裸になってゴーゴーをおどるようなもので、はずかしくてしかたがない。しかしこれは「新聞記者は人の子よ、ポッポの記者ではありませぬ、それエが何より証拠にはア……」の唄の文句のとおりの、記者の内側の人間的な素顔にはちがいないと、みずからあきらめて、目をつぶる。

もうひとつのグループは、新聞小説を中心にすえたもの、ときに新聞に対する評論といったものがまとめられている。このグループの延長線上の作業として、すでにまとめた『新聞合戦一〇〇年史』の草稿にいま補筆している。これまた機会があったら一本にまとめて、新聞のこれからの在り方を考えるひとつの手だてとし、あわせて、先輩に対するわたくしなりの鎮魂曲^{イミタリ}として捧げたい、と念じている。

一九七八年復活祭^{イースター}ちかき満月の夜

著者

目次

新聞小説をめぐって

新聞小説を考える	13
新聞小説史に取り組んで	21
読者を魅了したヒロインたち	25
生きているお宮と浪子	32
高山樗牛を世に出した懸賞	35
折口信夫の隠れた小説	40

新聞走馬灯

言論弾圧百年史

弾圧で葬られた小説群

挿絵画家がスカウトした名作

明治文学と読売新聞

塚原渋柿園と歴史小説

新聞社はどんな小説を望むか

『新聞小説はたそがれ』の説

新聞小説を発明した男

活字文化の空しい運命

83

66

39

75

67

61

57

50

43

秘史発掘

マスコミ紳士録	114
江戸のマスコミ・早筆者	130
総理大臣演説と時代相	135
政治家の言葉づかい Ⅱ日本失言史Ⅱ	154
従軍記者事始	153
三島由紀夫秘聞	164
日本人やマトフの生涯	167
Ⅱ幕末、ペトログラードの謎のサムライⅡ	

日中文化放浪

十八史略を紀行する	203
新・中国八景	217
北京の浅草・天橋	224
「春節」は紅に燃えて『中国の旧正月』	231
異文と同字	240
周恩来氏の握手	244
日中修交事始	248
蕎麦の文化交流	251
和漢・筆墨談義	255

琉璃廠の書店街……………230

青春色ざんげ

革命と接吻と……………265

女はコワイ！ かけ出し記者……………282

わが師わが母校……………294

忘れぬ友よ……………302

人生をきめた本……………307

おふくろの味……………317

大正男というやつは……………320

たちねの記……………301

老兵は死なず

山居明月記	335
愛人と夫人の間	341
花ひとつにも愛し方がある	343
女たちよ、男をだますな	346
モーレッツ社員足輕論	352
わが辞書に老後はない	355
老兵は死なず	360
山のひるめし	340
わたし一人の健康法	359

カバーデザイン・高宮武夫

新聞小説をめぐって



永井荷風「溍東綺譚」さしえ——木村莊八

新聞小説を考える

《その定義》「新聞小説」といわれるものは、小説のジャンルというより、小説の発表形体といった方が正しいだろう。厳密に、しかも当りさわりなく定義するならば「新聞に挿絵入りで掲載されて読者に伝達されるあらゆる種類の中編、長編小説」であり、わたくしはこれに週刊紙を加えてもよいと考えている。そうきめてかかれば、音楽がB・Gに入って朗読する小説を「ラジオ小説」といわないのがむしろ不思議なくらいである。もちろん作者の側の制約からすれば、日刊と週刊に制作上のちがいはあるだろうけれど、読む方は毎日が毎週になるだけの相違であり、それが大衆小説であれ、推理小説であれ、ユーモア小説であれ、なんでもかまわない。「面白」ければそれでよいのである。

この「面白さ」という点が、じつは新聞が新聞小説を掲載する上の重大な要件なのである。

《その発生》新聞小説はわが国に特異な存在のように思う人もあるけれど、決してそうではない。その発生は、日本の年代では天保十三年（一八四二）だから今から百三十数年前、フランスの「ジュールナル・デ・デバ」紙がユー・ジューヌ・シュエの通俗小説「パリの秘密」を

約一年間にわたって連載したのがはじめである。これが大当りを取り、船医だったシュールは一躍新聞小説の王 (Roi de roman feuilleton) といわれた。ゾラも、ドーズも、モーパッサンも新聞小説をさかんに書いた。

日本における新聞小説の発生はフランスの場合とすこし事情がちがう。ユージェニス・シュールよりも三十三年おくられて明治八年十一月、平井徳志氏の研究によると「平仮名絵入新聞」が、姦通した妻に対する傷害事件の裁判を物語り風に脚色、「岩田八十八の話」と題して連載したのがはじめである。

しかし、これを「新聞小説」と呼んでいいものかどうか、わたくしには疑問なのである。なぜならこの読み物は、連載三日目に当局から掲載を禁止された。筆者の前田夏繁（「平仮名絵入」記者）は、フィクションを加えて脚色したにもかかわらず、当局は「予審の内容を報道したものと」解釈したのである。一方、読者の方はどうかという、筆者のフィクションを事実そのままと思ひこみ、「八十八はその後どうした」とか「女主人公のみつはどうした」という問い合わせが新聞に殺到したという。読者もまた読み物を「面白いニュース」としてうけとり、小説とは思ってはいなかったことがうかがわれる。

「岩田八十八の話」が小説か、でないかは別として、すくなくとも読者の興味を「明日の新聞につなぐ」ものがこの種の読み物であることを新聞社自身が認識したということは、その後の新聞小説の発達と定型化への貴重な出発点となったことは争えない。その意味では「岩田八十